

日本家政学会
被服構成学部会誌

第31号

平成22年3月

目 次

・ 部会長ごあいさつ	1
・ 次期部会長ごあいさつ	3
・ 平成 21 年度 被服構成学協会 総会	5
・ 平成 21 年度 被服構成学協会 夏期セミナー	
プログラム	6
講演 1 「今、繊維・アパレル産業の展開に何が必要か？」	7
講演 2 「ビスコテックスによるパーソナルオーダー事業について」	8
話題提供 1 「産学連携で取り組む被服構成学視点からの商品開発」	9
話題提供 2 「福井県工業技術センターの スマートテキスタイルの取り組みについて」	10
井上プリーツ（株）とビスコテックス スクエア福井見学に参加して	11
夏期セミナーに参加して	12
・ 第 15 回アジア地区家政学国際会議 (ARAHE インド大会) に参加して	13
・ 研究報告 「衣服の動作適応性評価からみた高齢者の特性 —衣服の拘束による頸肩腕負担—」	14
・ 研究報告 「衣服のバリアフリー設計のための基礎研究 —高齢者の着装と着脱の観点から—」	16
・ 平成 20 年度 文部科学省 科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) 「研究成果公開発表 (B)」 による公開講座報告	18
・ 第 10 回 全国中学生創造ものづくり教育フェア報告	19
・ 関連学会短信	
ITAA2009 年年次大会	20
日本人間工学会 衣服人間工学会	21
日本衣服学会	21
・ 平成 21 年度 修士論文テーマ・要旨	22
・ 会務報告	24
・ 平成 20 年度 被服構成学協会 夏期セミナー収支報告	25
・ 平成 20 年度 被服構成学協会 収支決算報告	26
・ 平成 21 年度 被服構成学協会 予算	27
・ お知らせ	28
・ ご案内	29
・ 被服構成学協会 会則	30
・ 平成 20・21 年度役員, 平成 22・23 年度役員	32
・ 入会申込書	33

部会長ごあいさつ

(社) 日本家政学会被服構成学部会
部会長 泉 加代子 (京都女子大学)

卒業生を送り出し、桜便りの届く頃となりました。平成 21 年度の被服構成学部会の事業も 3 月 26 日開催の研究例会をもって終了します。この 2 年間、運営委員はじめ部会員の皆様のご支援とご協力を得て、部会の事業を進めることができましたことを心より感謝申し上げます。有難うございました。

平成 21 年度は日本家政学会の一般社団法人への移行にむけての対応にあたふたした 1 年でした。学会の総会議案書に部会の事業報告および決算、事業計画および予算を明記する必要性が生じたので、決算書は 5 月の学会総会前に監査を済ませて部会総会で承認を得ておくように、部会総会を開催したことの証拠となる書類を残すようにとの指示がありました。それにしたがって、臨時総会開催のご案内を部会員の皆様に郵送し、欠席者からは委任状を頂きました矢先、新型インフルエンザの影響で学会開催が 8 月に延期となるハプニングが起きました。

8 月の部会総会で、被服構成学部会は従来どおり家政学会の一組織として活動していくことが承認されました。学会総会以前に部会総会で前年度の決算報告等の承認を得ておくために、部会の総会開催時期を夏期セミナー時から家政学会大会時の本部総会前に変更することを提案し、ご承認いただきました。また、学会の定款および部会運営規程も改正されますので、それらの改正案にそって部会会則を改正する必要があります。現在、学会コンサルタントの助言にしたがって改正案を修正しています。5 月の部会総会で、「被服構成学部会規約」として新部会長の布施谷節子先生のもとで新会則をご承認いただくこととなりますので、総会には是非ご出席下さいませようお願い致します。家政学会は 6 月に一般社団法人の認可申請を行い、平成 23 年 2 月頃に認可される予定です。それまでは部会の運営も落ち着かないことと思いますが、ご協力よろしくお願い致します。

大学淘汰の時代に入り、部会員が所属しておられる大学の中にも学生募集停止、廃校となる大学があります。この 2 年間は、このような厳しい状況の中で、被服構成学の生き残りを考えて夏期セミナーのテーマ設定を行いました。平成 20 年度の「工業製品としての衣服—先端研究からアパレルの現場まで—」、平成 21 年度の「社会的ニーズに対応したアパレルの開発動向」の講師の先生方から刺激を受け、沢山のなすべき課題があることを教えていただきました。平成 21 年 3 月の科研費補助金研究成果公開促進費による公開講座では、男性を含む多数の一般の方々の参加を得て、「久しぶりに被服分野の活力を感じた。」「衣服を見る目が変わった。」「日々の家庭科教育に、またやる気を持って頑張っていこうと思った。」などと、大変好評に終えることが出来ました。平成 21 年度から研究成果公開促進費の申請が制限され、家政学会から 1 件しか申請できなくなりましたが、部会員の教育と研究の成果を社会に発信する事業として、今後も実績を積み上げていただくことを願っています。また、平成 14 年度から後援・協賛してきました全国中学生創造ものづくり教育フェアは、コンテスト作品がハーフパンツからバッグに変わりましたが、コンテストに部会賞、生徒作品コンクールに部会奨励賞を授与しました。こちらも社会との連携を図る大切な事業です。

今年度の入試の出願状況を見ますと、関西では家政系への受験生が昨年より増加した大学が多いように見受けられました。次から次へと押し寄せる大学改革の波に被服学、被服構成学分野が流されないためには、今後も部会員が手を携えて、人間にとって如何にこの分野の教育と研究が大切かを社会に発信し続けることが肝要です。

部会員の皆様の研究のさらなる発展と部会の活性化を願っております。

次期部会長ごあいさつ

(社) 日本家政学会被服構成学部会
次期部会長 布施谷 節子 (和洋女子大学)

一昨年は被服構成学部会発足 30 周年を迎え、昨年の部会誌は記念特集号となりました。歴代の部会長が被服構成学発展のために強いリーダーシップをお取りくださり、輝かしい業績を残してくださいました。このたび平成 22・23 年度の部会長を仰せつかり、身の引き締まる思いです。これまで何回か運営委員として関わって、いろいろ貴重な経験をさせていただいたり、仲間ができるなどの楽しい経験はありましたものの、構成学の方角性などのような大所高所からの視点を持っていなかった私としては不安でいっぱいでございます。これからの 2 年間は、岡部和代先生、鳴海多恵子先生お二人の次期副部会長をはじめ、運営委員の先生方のお助けを得て、何とか勤め上げたいと思っていますので、部会員の皆様方のご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

今日では、少子化の影響で、学生定員を満たすために、大学においては数多くのオープンキャンパスや多様な入試形態に対応して、一年中入試期間のようにさえ感じられます。それに伴い、部会員の皆様方の日常業務が多忙となっていることと思います。また、改組や再編などを繰り返す中で、被服構成学関連の授業が削減されたり、退職教員の後任が補充されないなどということをよく耳にするようになりました。部会員が減少し、若手研究者が育ちにくい状況においても、従来からの被服構成学の灯を絶やさず、むしろ新しい時代に求められる輝きを放てるような魅力ある研究テーマを求めていかなければならないと思います。また、被服構成学の実習や授業が今日の学生にとってわかりやすく、楽しく、有用だと感じられるような授業の工夫も求められていると思います。

夏期セミナーや研究例会などに参りますと他の学会や研究会では得られないような、何ともいえない安堵感、言い換えれば里帰り感覚を覚えるのは私だけではないと思います。各大学において、お一人お一人の先生方は厳しい環境の中で戦っていらっしゃることでしょう。せめて、同じ研究を志す仲間が集う被服構成学部会では心の交流を図り、研究のヒントを得て、また頑張ろうと、勇気を得られるようなそのような部会にしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

平成 21 年度 被服構成学部会 総会

日時：平成 21 年 8 月 25 日（火）

会場：あわら温泉 グランディア芳泉

平成 21 年度被服構成学部会総会は、岡部和代副部長の司会により下記のとおり進行した。

総会次第

1. 開会の辞 岡部 和代
2. 部会長挨拶 泉 加代子
3. 報告
 - (1) 平成 20 年度事業報告 森 由紀
 - (2) 平成 21 年度事業中間報告 森 由紀
4. 議長選出 小山 京子
5. 議事
 - (1) 平成 20 年度会計報告 林 仁美
 - (2) 平成 20 年度会計監査報告 冨田 明美
 - (3) 平成 20 年度夏期セミナー会計報告
川上 梅
 - (4) 平成 20 年度夏期セミナー会計監査報告
佐藤真知子
 - (5) 平成 21 年度予算（案） 林 仁美
 - (6) 平成 22 年度事業計画（案） 森 由紀
 - (7) 次期部会長推薦の件 泉 加代子
 - (8) 平成 22・23 年度監事推薦の件
泉 加代子
 - (9) (社) 日本家政学会の一般社団法人への
移行に伴う部会の対応 泉 加代子
6. 議長解任
7. 次期部会長挨拶 布施谷節子
8. 閉会の辞 岡部 和代

上記の内容について審議、承認された。



総会・夏期セミナー 参加者



井上プリーツ見学の様子



ビスコテックス スクエア 福井店内 風景

平成 21 年度被服構成学部会総会ならびに夏期セミナー
「社会的ニーズに対応したアパレルの開発動向」

期 日： 2009 年 8 月 25 日 (火), 26 日 (水)

会 場： あわら温泉 グランディア芳泉 グランディアホール (5F)

〒910-4193 福井県あわら市舟津 43-26

プログラム

8 月 25 日 (火)	
13:15～	受付開始
13:45～13:50	開会の辞 部会長挨拶
13:50～14:50	講演 1 「今、繊維・アパレル産業の展開に何が必要か？」 福井大学大学院工学研究科教授・副学長 堀 照夫 氏
14:50～15:00	休憩
15:00～16:30	講演 2 「ビスコテックスによるパーソナルオーダー事業について」 セーレン株式会社 ビスコテックス部門 部門長 執行役員 牧田博行 氏
16:30～16:40	休憩
16:40～17:10	総会
18:00～20:00	懇親会
8 月 26 日 (水)	
9:30～10:30	話題提供 1 「産学連携で取り組む被服構成学的視点からの商品開発」 日本女子大学教授 大塚美智子 氏
10:30～10:40	休憩
10:40～11:40	話題提供 2 「福井県工業技術センターのスマートテキスタイルの取り組みについて」 福井県工業技術センター 化学・繊維部 主任研究員 村上哲彦 氏
11:40～11:50	閉会の辞
11:50～13:00	昼食休憩
13:00～16:00	見学 ① 井上ブリーツ株式会社 ② ビスコテックス スクエア 福井 (JR 福井駅 解散)

講演1 「今、繊維・アパレル産業の展開に何が必要か？」

福井大学大学院 工学研究科
堀 照夫 氏

繊維・アパレル産業における現在までの流れと、販売・研究されている繊維の特徴および今後の繊維・アパレル産業への期待についてご講演をいただいた。

繊維は「衣」・「食」・「住」の一角を担い、重要であるが、先進国の衣料分野は非常に厳しい現状にある。先進国における繊維素材の展開は衣料分野のみならず、“飲む”繊維、医療、通信・IT、自動車・航空機、建築・建設のテクニカルテキスタイルや産業用素材に至るまで幅広く行われている。経済省の「技術戦略マップ2007」に初めてファイバー分野が盛り込まれたことから政府の繊維産業に対する意識の向上が伺える。これは、情報通信、ライフサイエンス、環境・エネルギー、ナノテクノロジー・材料、ものづくりの5分野から構成されており、今後の繊維材料の展開の中心として期待される。

天然繊維は、合成繊維が出現する以前から衣料素材として使用されてきた。天然繊維の今後の動向として、綿・絹・羊毛は引き続き微増し、綿以外のセルロース系材料亜麻、ジュート、マニラ麻は流行に左右されやすいと思われる。石油の枯渇や地球温暖化など世界的な状況の影響もあり、竹、バナナ、パイナップルなどからも繊維材料が作られている。セルロース系の材料は再生可能な(sustainable)材料として現在注目されている。今後、硬く、太い材料を柔らかく、細い繊維に仕上げ、違和感のない衣料用繊維に仕立て上げることで更なる展開が期待される。羊毛以外の動物の毛としてカシミヤ、アンゴラ、水牛、アルパカなどが使用されている。日本人はカシミヤを好み、現在ではアルパカも人気がある。しかし、これらの羊毛以外の動物の毛は流行に左右されやすい。また、半合成繊維であるテンセルやリヨセルは一定の展開を維持し続けている。

合成繊維では、ポリエステルが生産量が着実に伸び、ナイロン・アクリルはほとんど伸びていないのが現状

である。ウレタン繊維は一時的なブームが去り、現在では混織・混紡に用いられ、主となる使用はほとんどない。一方で注目されるのはスーパー繊維と呼ばれるアラミド繊維、PBO繊維、超高速紡糸したPPなどの高強力・高弾力繊維である。化学繊維の生産量は90%以上が海外で、内80%程度が中国を中心とするアジアで生産されている。

これからの日本のテキスタイルは、衣料が25%、非衣料・産業テキスタイル分野が75%程度である。今後の繊維はナノテクノロジーと融合し、インテリジェントな機能を付与し、バイオメティック材料など新しい方向への展開が期待されている。その一部として、現在の衣料繊維は、蓄熱繊維のサーモトロン®(ユニチカ)、蓄冷繊維のアイスタッチ®(ミズノ(株))、ウェルキー®(帝人ファイバー(株))、エスモ®(クラレ)などがある。高齢化社会のニーズに応じて医療分野におけるバイタルデータ管理システムを備えたライフジャケット、人工腎臓・人工血管・人工肺などの人工腎臓への展開が今後さらに期待できる。また近年世間で注目されたレーザーレーサー社の水着を含むスポーツ・レジャーウェアもさらに進歩してゆくと思われる。また、航空・宇宙など期待される分野は数多く存在し、経済産業省繊維課が注目している今だからこそ、手を打てばまだ日本の衣料用繊維産業も生き延びることができる。

今後、日本もしくは世界で注目される繊維分野について新しい展開を行うことで、現在の繊維産業の厳しい状況を打開していく可能性があるという大変興味深い講演であった。(記録 十一 玲子)

講演 2

「ビスコテックスによるパーソナルオーダー事業について」

セーレン株式会社 ビスコテックス部門 部門長 執行役員
牧田 博行 氏

福井県福井市に本社を置く繊維メーカーであるセーレン株式会社(明治22年創業、従業員数5,007名)のビスコテックスによるパーソナルオーダー事業へのとりくみについて、解説していただいた。概要は以下のようである。

1. 繊維産業を取り巻く環境の変化について

繊維産業は戦前戦後における日本の基幹産業の一つとして、特に米国への繊維製品の輸出により外貨獲得で大きく貢献してきた。しかし、ニクソンショック、オイルショック、プラザ合意などにより輸出への大きな打撃をうけ斜陽化が始まった。現在は日本の繊維製品の90%以上が輸入品で、中国からの輸入品が大部分をしめる。

2. わが社の環境変化への対応について

北陸地方の染色企業であったが、環境変化に対応し、1987年より繊維製品の企画、製造、販売を行う企業形態へと変化した。現在は戦略的IT活用による斜陽産業からの脱却を経営戦略とし、①流通のダイレクト化②非衣料・非繊維化③グローバル化④企業体質の変革をめざしている。2005年にカネボウ株式会社の繊維部門を引き継いだことにより流通のダイレクト化を実現し、原糸製造から小売までを1社でおこなう体制を整えた。川上、川中、川下とすべての工程を1社で行うことで、在庫を極限まで減らす可能性を追求している。

3. ビスコテックス：VISCOTECS 事業について

在庫レスの具現化をコンセプトに1980年半ばから自社でビスコテックスの開発をスタートとした。ビスコテックスとは、“VISUAL COMMUNIATION TECHNOLOGY SYSTEM”の頭文字をとって名付けた当

社のブランド名で、インターネットなどの通信ネットワークを利用してユーザーと生産現場を直結することによるデジタルな企画製造販売のシステム名を指す。従来の大量生産型の染色設備から脱却し、PC向けに実用化したインクジェットプリンタの技術を繊維の染色に応用し、量産設備を開発したことがシステムの中核である。他社に依存せず要素技術をすべて内製化することで小ロット生産を実現し、短納期、在庫レス、低コストで付加価値のある商品を市場に供給することが可能になってきた。現在は米国、タイ、中国など海外の生産拠点でもオリジナル生産設備が稼働している。21世紀の日本がめざす物作りで中国と対極のものと考えている。

4. パーソナルオーダー事業について

究極の物づくりとして、ビスコテックスによるパーソナルでオン・デマンドなオーダー生産、販売システムの構築を目指している。ファッション分野では、「あなただけの1着を1週間でお届けする」を目標に、百貨店、自社店舗を中心に水着、浴衣、デニムパンツを対象にした展開をしている。消費者との対話に基づいてデザインCADで作成したデータを取り込んでインクジェットプリンタで布を染め、デジタル生産で最終製品に仕上げることにより、多彩なユーザーニーズに応える新しい形のハイファッションを創出している。自動サイズ計測システムの開発などもすすめていて、今後アイテムを増やす予定である。

5. ビスコテックスの今後の可能性について

ビスコテックスをコア技術にした開発により、繊維製品はもちろんバイオメディカル資材、メディカル資材など非衣料・非繊維分野での展開をはじめている。

(記録 土肥麻佐子)

講師の大塚美智子先生は被服構成学、被服体型学、人間工学分野をご専門にされ、永年に亘り、教育・研究活動に広くご活躍されてこられた。

先生が産業界と連携してパンツ型紙おむつの商品開発を行うきっかけとなったのは、2002年花王（株）サニタリー研究所の方が被服構成学の専門家である先生のもとに乳幼児のおむつに関する質問に来られたことに始まる。その際、先生は企業側とのおむつに対する考え方に大きなギャップを覚え、乳幼児の形状とパンツ型紙おむつの形状とがあまりにかけ離れていることにも衝撃を受けた。そして専門的立場の異なる研究所の方々に、乳幼児の身体形状と動作特徴に合った被服構成学的視点からのおむつ設計の必要性を説いた結果、「今あるおむつを改良するのではなく、一から理想のおむつのデザインをともに作っていききたい」という企業側の姿勢に動かされ、産学共同プロジェクトがスタートしたのであった。

この共同開発におけるキーポイントは、研究領域を明確に分担したことである。「おむつは衣服である」と考える先生は基本的な考え方として身体機能への配慮をまず第一に考え、フィット性、体型、サイズ、姿勢についての研究を担当し、素材開発を専門とする企業側研究者は肌触りや保湿性、発散性、重量など素材面での開発を担当し、それぞれの専門分野で明確に棲み分けを行い、研究を進めていった。企業との商品開発をする以上は企業が決定した目的を達成することが使命であり、納期や売り上げなどの目標に向け、研究体制やスケジュールも厳しいものとなる。先生は「乳幼児の体型と動作にフィットし、動作時のずれを軽減したパンツ型紙おむつの設計をする」というミッション（使命ともいえる課題）を粛々と進めていった。

研究は、1. 体型調査・分析 2. 腰部の動作解析 3. おむつのずれ防止のための検討 4. 立体裁断で採取したパターンの比較という4段階で、赤ちゃんモ

ニターを対象にして、マルチン法やスライディングゲージ法、三次元計測法、動作解析、立体裁断法などの被服構成学の考えられうる手法を駆使して行った。その結果をもとに、ゆとり量を加えない標準体型ヌードボディーを作成、さらに動作解析から身体各部位の伸び率を考慮しゆとり量を配分した動作対応型乳幼児標準ボディーを作成し、さらに乳幼児の体型の特徴にフィットする理想のおむつを追求して着用実験なども含め、様々な角度からの検討を重ねた。その結果、ずり落ちを軽減する設計は、腸骨上部を安定させるためのギャザーを付与することで、少ない締め付けでずり落ちないおむつ設計を可能にすることが出来た。並行して研究所で行われていた快適性を高める素材開発と併せ、フィット性を高め、締め付けが少なく、快適な素材を用いた乳幼児用紙おむつは2005年に商品化された。この“腸骨ギャザー”は世界特許を取得し、商品は広く市場に受け入れられ、2008年度グッドデザイン賞とキッズデザイン賞を受賞した。

企業との共同研究には、商品開発という企業側のペースと大学の研究者としての研究へのこだわり方の違い、あるいは知的財産の扱い方や特許の問題など課題はたくさんある。しかし研究の成果が商品化される喜びとともに、良い商品が社会に出るといことは社会貢献であるという自信と誇りを得ることができた。

最後に、私達が地道な研究により積み上げてきた被服構成学の数々の知見は、用途が明確な生活用品やスポーツウェアなどの設計に大いに役立つものであり、まさに企業にとっては宝物である。この宝物の存在を積極的に主張し、戦略的研究に取り組む時期がきているのではないかと締めくくられた。

（記録 林 仁美）

話題提供2 「福井県工業技術センターのスマートテキスタイルの取り組みについて」 ～テキスタイルセンサー、プラスチック光ファイバー織物、RFID テキスタイルの用途展開～

福井県工業技術センター 化学・繊維部 繊維研究グループ
村上 哲彦 氏

次世代の製品として注目されるスマートテキスタイルは、環境から刺激を検出し、各々の状況に反応して自らが適応するという機能をもたせた製品である。反応の仕方は様々であるが、簡単な操作性でユーザーの要求や環境に対して適切な時間と場面にサービスができるように設計されている。

今回は、こうしたスマートテキスタイルの研究成果について、近年のスマートテキスタイルの動向をふまえながらスライドだけでなく、多くの実物を回覧していただきながらお話しいただいた。

福井県工業技術センターのスマートテキスタイルの取り組みとして紹介していただいたのは、テキスタイルセンサー、RFID テキスタイル、POF 織物の3種に関する用途展開で、固有の対象者に対する形態性や着用性を重んじたスタイルから、視覚的な効果を求めるものまで、幅広い用途の可能性を持ついずれもが現代のニーズに対応した開発事例であった。

テキスタイルセンサーは、織物多層構造体の圧縮特性を検知する機能を有したもので、繊維の構造体とセンサーが一体化しているため、柔軟で薄いという形状特性がある。また、織物製造時にセンサーを配置するため、低コストで容易に大平面化が可能なので、実用化が大いに期待されている。テキスタイルセンサーの展開開発事例(ユティック共同開発)では、介護施設での車椅子使用時での用途として試作開発された着座センサーを紹介いただいた。これは、車椅子から人が立ち上がった時に離床を検知するシステムであり、このシステムにより、離れた場所に居ても車椅子からの立ち上がりを知ることができる。

次にRFID テキスタイルでは、位置認識システムとして靴にRFID リーダー、無線通信システム、バッテリーを装着し、コンピューターにRFID の読み取りを行うシ

ステムが開発されており、これにより精度の高い歩行軌跡を表示できる。

一方、POF 織物は、光ファイバーよりも曲げに強く柔軟性が高く、軽量で安価なPOF を利用した発光する織物として有用な織物であり、開発事例ではプロジェクターとハロゲン光源を利用したインテリア資材としての「色が変わる織物」(写真1: ジャパンクリエイション2004での服飾資材部門賞を受賞)のほか、柔軟で厚さの薄いPDF 織物を使用した発光する衣料(写真2)が試作されている。

近年の日本では、海外からの輸入に押され厳しい現状が続く。そうした中で、福井県は繊維生産量の国内の約20%を占めており、その用途では約60%が衣料、次いでインテリアや産業資材ということであった。こうした背景は日本の繊維産業の現状が厳しい中において、福井県の技術開発が果たす役割の大きさをあらためて感じさせられた。今後もスマートテキスタイルは、テクニカルテキスタイル分野として、さらに開発の方向性を明らかにしながら、研究が取り組まれるとのことである。

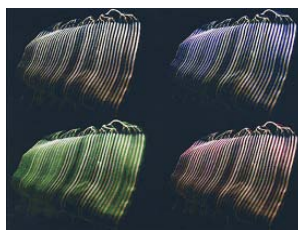


写真1 色が変わる織物



写真2 発光する衣料

(写真資料:平成21年度被服構成学部会 総会・夏期セミナー
要旨集より引用) (記録 森下あおい)

井上プリーツ(株)とビスコテックス スクエア福井 見学に参加して

金城学院大学 片瀬 眞由美

見学会では「繊維産業の先端を行く町 福井」の中でも、特に活発に展開されている2社を訪問した。

●井上プリーツ株式会社

井上プリーツは、昭和27年に日本で初めてプリーツスカート技術を開発した実績を持ち、アパレルからインテリアまで、幅広い分野で質の良いプリーツ製品の生産を行っているプリーツ専門メーカーである。

見学会ではまず、代表取締役社長の井上勝博様より、会社概要とプリーツ加工の基礎知識、井上プリーツが得意とするプリーツ加工「pleeets」に関するご紹介を頂き、参加者を3班に分け、本社工場の中を見学させていただいた。最近では海外工場に生産拠点をすべて移すメーカーも多い中、井上プリーツでは、高品質な製品を本社工場で縫製工程までを作成する「メイド・イン・ジャパン」にこだわっておられるとのことであった。

また、工場内には若い女性が多数勤務しておられ、すばらしい加工技術が次の世代に伝承されていることに感激した。若者を惹きつけるものづくりの魅力が、この町・この会社にはある。そのことが社内の活気から伝わってきた。



【見学風景:井上プリーツ】

二人がかりでのプリーツ加工の様子を見学。カートンへ布地を型入れする折り込み作業は、呼吸を合わせて慎重に行う熟練の技。手際の良さに参加の先生方も感心することしきり。

●ビスコテックス スクエア福井

ここは、セーレン株式会社福井本社の1階にある、オリジナルブランドの直営店である。自社製品を展示販売するだけでなく、この会社の目玉である

「VISCONAVIシステム」を使って、自分にピッタリのデニムや水着を自分でコンピューター操作をしながらデザインし、注文できるのが特徴である。特に、本物と見まごうようなリアルなプリント技術を生かし、ダメージ加工やポケット柄をプリントしたデニムは人気が高いとのことであった。店内には、その他、カラフルな水着など、セーレンの製品で埋め尽くされ、参加者の先生方は、手に手に思い思いの製品を取り、プリント技術の高さに見入っていた。

不景気の中、繊維産業やアパレル産業の弱体化や縮小化が危ぶまれているが、ここ福井には、その心配がないような頼もしさを感じたのは、私だけではなかっただろう。高品質な繊維の開発技術を武器に、ぶれることなく前を見据えたものづくりに徹する。福井の元気を知ること、今後の被服構成学教育への力を与えて頂くことができたと思う。



【見学風景:ビスコテックス スクエア福井】

顧客が自分でコンピューターを操作して、自分だけの製品が作れる「VISCONAVIシステム」で、オリジナルデニムの注文「デニムナビ」を体験。水着を作る水着ナビも好評とのこと。

夏期セミナーに参加して

目白大学

高橋 美登梨

和洋女子大学大学院 総合生活研究科

森岡 千草

講演では、「社会的ニーズに対応したアパレルの開
発動向」をテーマに繊維を中心に勉強させていただきました。
これまで「繊維＝衣料」というイメージが強
かったのですが、講演で何度か「非衣料化・非繊維化」
といったキーワードが出てきたほか、繊維の約75%が
非衣料用というお話もあり、繊維が衣料以外の場面で
多様な使われ方をしていることを知りました。繊維の
発展は、衣服にも変化をもたらすと考えられるので、
今後、どのような繊維技術が開発され、衣服に使用さ
れていくか注目していきたいです。

被服構成学の立場からおむつの設計に取り組んだ大
塚先生の研究発表から、おむつ設計は、必ずしも構成
学的な視点から行われていないことを知りました。昨
年度の夏期セミナーでも話題になっていましたが、体
型を捉えることの重要性を再認識しました。

井上プリーツでは、とても興味深く見学させていた
だきました。ボール紙でできたプリーツの型(カルト
ン)やプリーツをつける機械(真空蒸発セットボック
ス)等をみるのは初めてでした。近年では、ファストフ
ァッション等も注目されていますが、井上プリーツの
ような手間をかけた衣服も大切にしていきたいと思
いました。ビスコテックスの見学では、最新のプリント
技術に触れることができました。ビスコナビで作った
ジーパンは、一見、本物の織物のような染め上がりな
ので驚きました。

福井の方は、繊維工業を大切にしていることが伝わ
ってきました。その雰囲気の中で、様々なことを学ぶ
ことができ充実した2日間となりました。

今年のテーマは「社会的ニーズに対応したアパレル
の開発動向」でありました。今回の会場となった福井
県に訪れるのが初めてでしたし、繊維産業が盛んであ
ることをあまりよく知りませんでした。ですので、紡
糸から染色まですべて一貫しているというお話など大
変興味深いお話を拝聴する事ができました。繊維メー
カーが製造する繊維の内「衣」の分野は約25%に過ぎ
なく、日本の被服費もどんどん下がっていく傾向の中
で、高い技術力を維持しながら、新しい技術を見出し
ていくことの重要性を理解する事ができました。繊維
の様々な利用方法などのご説明もあり、繊維産業の広
がりが大変よくわかりました。

被服構成学視点からの商品開発のご講義は、企業と
共同研究された過程を分かりやすく教えていただき、
服飾構成学の知識を利用する場面は多いと感じました。
私はスポーツウェアに興味があるので、このような研
究をして、よりよい衣生活の充実に自分の知識が役立
てられたらいいなと思いました。

また、井上プリーツ株式会社ではプリーツ加工の工
程をひとつひとつ丁寧に教えてくださり、楽しく見学
させていただきました。機械がどんなに開発されても、
肝心なところはやはり人の手なのだと感じました。ビ
スコテックスでのデニムのオーダーメイドは、しわや
ダメージを忠実に再現できる染色の技術に驚きました。

本セミナーを通じて、たくさんの先生方とお話させ
ていただくことができ、充実した二日間でした。是非
来年も参加させていただきたいと思います。ありがと
うございました。

第 15 回アジア地区家政学会国際大会に参加して

ARAHE 設立 25 周年記念インド大会

実践女子大学 高部 啓子

標記大会が平成 21 年 12 月 11 日（金）～15 日（火）にインド Pune 市で開催された。ムンバイ市（昔のボンベイ）の東南約 120km にある Pune 市は、私たちには馴染みが少ないが、インドでは 8 番目に大きな学園都市である。市内にある MKSSS（The Maharshi Karve Street Shikshan Samstha）と Vitz Hotel が今大会の会場であった。プレコンGRESと歓迎レセプションの会場となった MKSSS は約 100 年前に設立された女子大学で、創設者は日本の女子大学を参考にしたといわれ、日本女子大学とも交流のある 7 つの学部を持つ総合女子大学である。キャンパス内には小中高等学校はもちろん孤児院や老人ホームもつくられている。大会参加者は 15 カ国から約 180 名と発表され、参加者名簿では日本の参加者は 65 名となっているが定かでない。大会テーマは Social Upliftment through Human Empowerment in the Perspective of Home Economics である。

プレコンGRESでは、テキスタイルとファッション予測というテーマのセミナー、ミラー刺繍やサリーの着付け、ブロックプリント、インド料理の体験、クラフトフェアが行われた。歓迎レセプションに先立ちキャンパス内の行進が行われた。高校生の鼓笛隊に先導されて、赤いターバンを巻いた役員、その後に各国からの参加者が続いて行進した。沿道には付属の中高校生や孤児院の子ども、老人施設の老女等が出迎えた。レセプションではインドの伝統的な舞踊が演じられた。インドは多くの州で構成されており、それぞれを代表するさまざまな種類の舞踊が丁寧な解説とともに演じられた。その後buffestailのインド料理を楽しんだ。終了したのは 10 時近くだった。

12 日には開会式が盛大に行われた。花に飾られた壇上には挨拶や基調講演の担当者が並び、紹介のたびに花束と記念品が贈呈され、挨拶や講演は予定時間に関

係なく延々と続いた。インディアンタイムを実感した。

研究発表では口頭発表 57 件の内、被服学に関するものは 18 件、その内容は、染色整理 7 件、材料 9 件、アパレル工場労働、消費行動各 1 件である。ポスター発表 54 件の内、被服学に関するものは 8 件、その内容は構成 1 件、消費行動 2 件、ジェンダー 2 件、流行 2 件、企業経営 1 件であった。研究発表全体では申し込んだのに要旨集に記載されていない、口頭発表では当日キャンセルが続出など、今までの大会には見られない混乱があった。その他大会テーマに沿ったカントリーブレゼンテーションを、日本を含む 7 カ国が行った。

Interaction Collaboration の企画は 25 周年記念大会を特色づけるもので、若い研究者に国際的なネットワークをつくる機会を与えるものとして画期的であり、記念大会の目玉と捉えていた。しかしふたを開けてみると、申し込んだのに発表できなかつたり、要旨集に記載されていない発表が行われたりと不満の残る結果となってしまった。

総会は時間を限られ、閉会式はインド流を押しつけられて延々と挨拶が続くなど、文化の違いを見せつけられた気がする。閉会式の後は MKSSS の学生作品のファッションショーとなった。ここでも MKSSS の紹介ビデオが流された後、学生 150 人分の作品の紹介が延々と続き、ARAHE 関係者は途中退席してしまった。

翌日はエクスカーションで、約 40 名が参加して農業開発トラスト、ワイナリー、アパレル工業団地を訪問した。大会テーマに沿った意義ある見学だったと思う。



研究報告

衣服の動作適応性評価からみた高齢者の特性

—衣服の拘束による頸肩腕負担—

昭和女子大学 下坂 知加

研究の背景

日本が世界に類を見ない早さで高齢社会に突入している現在、高齢者の生活の質の向上、即ち、高齢者が自立して快適に過ごせる環境を整えることが重要である。高齢者では衣服の着装行動が、精神的、身体的健康状態の維持向上や自立への意欲に関連しており、高齢者にとって着脱しやすく着心地の良い衣服の提供が急務である。しかし、衣服業界の現状は若年者を対象とした生産に偏りがちで、高齢者からは既製服への不満が多く挙げられて久しいが、その状況は未だ続いている。従って、高齢者が心身共に快適な衣服の設計条件を明らかにし、それを製品設計へと役立てることが課題と言えよう。そのためには、高齢者と他の年齢グループとの比較研究を行い、衣服の快適性に関する高齢者の特性を見出すような研究の蓄積が必要である。

研究の目的

高齢者にとって快適な衣服設計を行うためには、加齢による心身機能の変化を捉え、それに対応した衣服の設計条件について見出すことが重要である。高齢者用衣服設計に関しては、これまで様々な研究が行われているが、衣服の快適性を左右する衣服の動作適応性については研究蓄積が少なく、特に、衣服の拘束による高齢者と他の年齢グループとの身体的な負担の違いを量的に見出した研究はあまり見当たらない。そこで、本研究では、若年者と高齢者を対象に着用実験を行い、衣服の動作適応性評価から両年齢グループの共通点や相違点を明らかにすることを目的とした。

1. 衣服の動作適応性の評価方法の検討

衣服の動作適応性の評価方法に関する2つの基礎的実験を行った。実験1では、官能評価、衣服圧、筋電図を用いて各々の評価結果と衣服の設計条件との関連性、主観的評価と客観的評価との関連性について検討した。着用者は若年女子5名である。実験要因は袖幅のゆとりで3水準に設定した。分散分析の結果、いずれの評価も袖幅のゆとりが有意となり、各々の評価に袖幅のゆとりが影響を与えていることがわかった。また、官能評価と衣服圧との間に相関 ($r = -0.711 \sim -0.878$) が認められた。さらに、衣服の拘束による上肢挙上角度などの動作変化が見られない場合には、官能評価と筋電図の間にも相関 ($r = -0.567 \sim -0.746$) が認められた。実験2では、測定時の姿勢を実験の要因とし、立位と椅座位の姿勢が三角筋の筋活動に与える影響について検討した。着用者は若年女子6名と高齢女子4名である。その結果、若年者では立位時に比べ椅座位時の筋活動が有意に大きかったが、高齢者では両者の筋活動に有意な差は認められなかった。これは、高齢者では立位の場合に、上肢動作を補助すると考えられる下半身の力が、加齢による衰えからあまり作用していないためと考えられる。従って、高齢者による実験では、体力の衰えが気になる場合は、より負担の少ない椅座位で行うことが好ましいと考えられる。

2. 衣服重量の差異が若年者と高齢者の頸肩腕負担に与える影響

快適性の主要因であり着心地や動きやすさを左右

する衣服圧に着目し、その発生要因の一つである衣服重量が若年者と高齢者の頸肩腕負担に与える影響について検討した。着用者は若年女子 10 名と高齢女子 9 名である。ジャケットの重量は 2 水準に設定した。ジャケット A, B の重量の差の平均値は約 165g であった。その結果、若年者では衣服重量の差を感覚としては捉えたものの、ジャケット A, B の筋活動に違いは見られなかった。一方、高齢者では衣服重量の差を感覚としては捉えなかったものの、衣服重量の増加によって大きくなる上肢動作時の筋負担への影響は、若年者に比べ有意に大きかった ($p < 0.05$)。また、若年者ではジャケット着用時に肩先部で最大衣服圧を示す着用者が多かったが、高齢者では加齢による体型変化の影響もあり、頸側部で最大衣服圧を示す着用者が多かった。

3. 衣服の動作拘束の程度が若年者と高齢者の着脱動作に与える影響

最も基本的な衣服行動の一つである着脱動作に着目し、衣服の動作拘束が若年者と高齢者の着脱動作に与える影響について検討した。実験要因は衣服の動作拘束の程度を数値で示すことができる摩擦係数とし、ブラウス素材とジャケット素材間の摩擦を 3 水準に設定した。着用者は若年女子 10 名と高齢女子 9 名である。その結果、若年者では素材間の摩擦が大きい程、官能評価が低くなった。しかしながら、高齢者では官能評価に、素材間の摩擦だけでなく剛軟度などの素材特性が影響を与えていることが示唆された。また、素材間の摩擦が大きい場合、若年者、高齢者共にジャケットの着脱動作時間が長くなり、着脱動作時の筋活動が増加した。特に、高齢者ではこの傾向が顕著であった。高齢者では腕を袖に通す動作で時間がかかる人が出現し、若年者に比べ着衣動作時の負担が顕著に増加する人

が存在した。

結 論

本研究では、衣服の設計条件を変化させた場合の若年者と高齢者の頸肩腕負担の違いを有意差のある定量データとして見出すことができた。衣服の動作適応性評価からみた高齢者の特性としては、加齢に伴う肩部形態の変化によって頸側部に負担がかかること、衣服重量や重ね着時の摩擦など衣服による拘束が大きくなると若年者に比べ負担が顕著に増加すること、衣服の動きやすさの感覚に素材のやわらかさが影響を与えていることを見出すことができた。

今後は、高齢者の身体形態と型紙設計からの検討を含めて、様々な条件で実験を重ね、高齢者にとって着脱しやすく動きやすい衣服の設計条件についてもっと明確に示していきたいと考える。年齢や身体機能と衣服の設計条件についてさらに研究を進めることで、今後、期待されている個人対応の衣服設計にも役立てることができよう。

本研究報告は 2009 年 3 月、昭和女子大学大学院 生活機構研究科 博士課程学位論文による。

謝 辞

研究を進め論文をまとめるにあたりご指導いただきました 昭和女子大学大学院の猪又美栄子教授に、心からなる感謝の意を表します。

武蔵工業大学大学院の谷井克則教授、昭和女子大学大学院の小原奈津子教授、芦川智教授、安宅信行教授、ならびに実験にご協力下さいました多くの皆様に、心から御礼申し上げます。

研 究 報 告
衣服のバリアフリー設計のための基礎研究
—高齢者の着装と着脱の観点から—

和洋女子大学 柴田 優子

現行の JIS 衣料サイズシステムでは高齢者は“成人”として区分され、20 歳代の若年者とも同じ区分となっている。しかし、高齢者は既製服を利用するにあたり、“JIS 衣料サイズシステムに則した身体寸法による規格サイズ(以降、“身体寸法による規格サイズ”とする)”であるにもかかわらず、身体が入らない、着られても動きにくい、着脱が困難という問題を生じるようになる。さらにこれらに対処するため、経験的に“身体寸法による規格サイズ”よりも大きなサイズを着装していると言われている。その一方で、これが原因となり、着崩れやきれいな着装ができていないとも言われている。そこで、これらの問題をすべて、バリアとして捉え、これらのバリアをなくすことが高齢者にとってのバリアフリー設計の衣服であるとし、そのための基礎資料を得ることを課題として以下の研究を行った。

まず第1に、高齢女性を JIS 衣料サイズシステムにおいて「成人女子」として区分することのバリアを検証することを目的に、高齢女性を被験者として、「成人女子」原型から製作した「成人女子」用の前あきシャツを実験衣とし、“バスト寸法による規格サイズ”から3サイズ大きなものを着用する実験を通して、着用者自身と他者からみた最も体に合っているサイズ選び、および動作適応性について調査した。これらから、高齢女性には“バスト寸法による規格サイズ”ではバリアがあるのか、そのバリアに対処してどの程度大きいサイズを着装するとよいとしているのか、サイズを変えるだけでバリアは解消できているのかについて、サイズの選び方に与えた身体計測値および動作拘束の観点から検証した。さらに、若年女性を被験者とする「成人女子」用シャツによる着用実験を高齢女性と同様の手順で実施し、若年女性を「成人女子」として区分することの妥当性についても検証した。

その結果、若年女性は“バスト寸法による規格サイズ”を着装することができ、着装者自身には1サイズ大きなものを適合と評価するものも多くいたが、他者からみた場合、“バスト寸法による規格サイズ”が最も適合すると評価していたことから、若年女性を「成人女子」として区分し、JIS 衣料サイズシステムに則してサイズを選ぶことには問題(バリア)がなく、妥当であることを確認した。一方、高齢女性では“バスト寸法による規格サイズ”を着装できないものが約30%もあり、着用者自身が“適合と評価するサイズ”は“バスト寸法による規格サイズ”よりも1サイズ大きなものや2サイズ大きなものを選んでおり、日常的にこのようなサイズを着装している実態を確認することができた。さらに、着用者自身の身体特徴としては胸腰部の前屈、頸部の前屈からの影響がみられ、より大きなサイズを選ぶ傾向がみられた。観察者にとっては上背部の突出や腹部の突出の不適合が気になり、より大きなサイズにしたほうがよいと捉えていることもわかった。また、大きなサイズを着装することは動作拘束におけるバリアには対応できていたことも検証できたが、同時に動作時の衣服のズレ上がりが大きくなり、美しく装えないことが明らかとなった。このように、高齢女性を「成人女子」として扱うことは多くの問題点(バリア)があることを検証することができた。なお、これらの研究の一部は既に人間工学(44(5), 296_301)に掲載されたものである。

第2に、高齢女性にとっての衣服のバリアフリー設計を目指し、高齢女性を新たに「高齢女子」として区分することの効果を検証することを目的に、体型や姿勢の加齢変化(上背部の突出、腰部の前弯の減少、腹部の突出、胸腰部の前屈、頸部の前屈など)に対応させた「高齢女子」原型から製作した「高齢女子」用のシャツによる着用実験を通して、“バスト寸法による規

格サイズ”が体に合うようになるのか、バリアは解消できているのかについて調査した。なお、検証方法はすべて「成人女子」用のシャツでの着用実験と同じである。

その結果、いずれの高齢女性も“バスト寸法による規格サイズ”が着装できるようになったこと、着用者自身の“適合と評価するサイズ”が“バスト寸法による規格サイズ”に近くなることを検証することができた。また、「高齢女子」用シャツは、「成人女子」用シャツに比べ、動作拘束を軽減させる効果があり、着崩れもしにくかったことから、高齢女性にとって「高齢女子」用シャツはバリアを軽減させる効果あり、JIS衣料サイズシステムに則したサイズ選びが可能になるということを証明した。

第3に、高齢者の着脱の困難さを究明することを目的に、衣服側の衣服設計やサイズの要因と着用者側の運動機能の低下にかかわる要因の観点から、“バスト寸法による規格サイズ”から3サイズ大きなシャツの着脱動作の様相を捉えた。合わせて官能評価も調査した。

その結果、高齢女性にとって「成人女子」用シャツに比べて「高齢女子」用シャツは着脱の困難さを軽減させる効果があることが検証された。さらに、サイズが大きくなればなるほど着脱の困難さが軽減されることを検証した。しかし、「高齢女子」用シャツを着用しても困難さは残り、衣服設計だけでは解消されないことも確認することができた。一方で、高齢女性・若年女性が日常的に行っている着脱動作は、着衣が4種、脱衣が1種の手順に類型化できた。また、繰り返し着脱しても常に同じ手順で着脱することから、各々に決まった手順をもっていることも明らかになった。さらに手順ごとに動作の特徴が異なることから、運動機能の程度にあった手順に変えることで困難さを軽減することにつながる可能性を示唆した。なお、上肢身体障害者を被験者とした着脱実験において、着脱手順ごとに着脱の困難さには違いがあることは既に検証済みであり、この研究の一部は(社)日本家政学会第60回大会(研究発表要旨集 197頁)でも発表してある。

最後に、IR-LEDをマーカとして直接皮膚に貼付し、衣服を着用した状態で衣服下の身体の動作を計測することを想定し、布を透過するIR-LEDマーカの使用方法和その精度について検証した。

その結果、遮蔽する布の種類と重ねた枚数は薄くて少ないほうが誤差は少ないことが明らかとなった。また、マーカと布が離れるほど誤差が生じることがわかった。ただし、布が厚くても計測点としての使用は可能であることが検証できた。また、カメラの位置は、IR-LEDマーカ指向角度内であればよいことがわかった。直接皮膚にIR-LEDマーカを貼付して行う動作計測は可能であり有効だといえた。また、ほとんどの衣服下で計測点として使用が可能であり、これは従来の身体の動作計測だけにとどまらず、着衣による動作拘束や衣服の動作適応性、着脱動作を明らかにするための動作計測をも可能にするが、現状ではマーカと布との距離が一定になるような衣服の着用する必要があることが示された。そこで、先に述べた、衣服下の身体の動き(着脱動作および着装時の身体の動き)を捉える実験の際はIR-LEDマーカを計測点である肌に直接貼り付けた上で、伸縮性のあるアンダーシャツを着用しマーカと布を密着させた状態で計測をした。また、衣服そのものの動きを捉える際は衣服に反射マーカを貼り付け計測することとした。なお、これらの研究は本論文中では付録として記載しており、すでに人間工学第44巻第5号(2008)にも掲載されている。

以上の結果をまとめると、本研究の成果の特長は、高齢女性が身体に合った既製服を選ぶ際の指標を整え、さらに着脱の困難を軽減するための方策を提案するものである。これは着用者自身の自立した衣生活を送るために重要であり、さらに既製服産業にとっても有用である。本研究を礎として、今後さらに衣服設計と動作との関係を明らかにしていくことで、衣服設計のバリアフリーに向けた基礎資料を積み上げることができると考えている。また、IR-LEDマーカを使用した動作計測方法は、被服を中心として関連する分野における今後の研究の展開に大きく寄与すると確信している。

平成 20 年度 文部科学省 科学研究費補助金（研究成果公開促進費） 「研究成果公开发表（B）」による公開講座報告

甲南女子大学 森 由紀

平成 20 年度の公開講座は、文部科学省科学研究費補助金の交付を受けて、平成 21 年 3 月 21 日にキャンパスプラザ京都にて開催されました。テーマは「生活の質を高める衣服 — 健康で自立した高齢期を過ごすために —」で、昨年度の内容を踏襲しながら、特に高齢期の衣のあり方を取り上げました。昨年度始めに実行委員長を仰せつかって以来、不安でいっぱいでしたが、多くの先生方に支えられ、何とかお役目を果たすことができました。

公開講座では、できるだけ多くの一般の方々の参加が望まれることから、内容的魅力はもちろんのこと、広報活動が重要となります。近隣の高校、介護福祉士養成の大学・専門学校、老人クラブ連合会、生涯学習センターなど、あわせて 374 機関に案内状を送りました。関係先生方によるご紹介も多く、泉部会長のご配慮から京都府および京都市教育委員会の後援をお受けでき、関係者以外の参加者が、165 名にのぼりました。うち一般の方が 107 名、なかでも 60～70 歳代の方が多く、大学教員が 28 名でした。北は北海道から南は鹿児島まで参加いただき、関心の高さがうかがわれました。京都駅から徒歩 5 分という会場の立地条件も幸いしたと思います。

基調講演では、元部会長の木岡先生から、部会のあゆみ、着心地に関するご研究の中身、衣は文化であり、生活にうるおいを与えるものであることなどをお話いただきました。前向きにいきいきとお過ごしの方のご自身のお姿に、多くの方が「おしゃれに生きる」ことの意味を感じ取られたと思います。

シンポジウムでは、高齢期を健康に豊かに生きるための衣の役割について、体型適合性、動作性、素材および着用者のこころという視点から、4 人の先生方が

日ごろのご研究の成果を一般にわかりやすく解説くださり、参加者からは活発な感想や質問が寄せられました。

ワークショップでは、「適合サイズ探し」「衣服圧体験」「ユニバーサルデザイン衣服の展示とアドバイス」「生き生きシニア・ファッションショーのビデオ上映と解説」を、納得いただけるように、それぞれ工夫を凝らしてくださいました。できるだけ多くを体験できるようにお昼休みにも開設をお願いしました。

ポスター発表は、今回のテーマにとどまらない、幅広い部会の活動や研究を伝えるのに、とても良い機会となりました。

アンケート結果では、9割が「満足した」とのことです。高齢女性からは「おしゃれに楽しく過ごしたいと強く感じた」、若い方からも「有益な内容が多かった」などの感想がみられました。特にうれしかったのは、「久しぶりに被服分野の活力を感じた」（高校教員）、「衣服を見る目が変わった」（50 代男性）などから、家庭科教育に携わる先生の切実な思いに応えられ、男性にも衣の魅力や大切さを理解いただけたと感じられたことです。また、「毎日、介護に追われているところ、楽しい時間がもてた。今日の内容を参考にしながら生活していきたい」（60 代女性）との感想には、胸がじんとなりました。講師の先生方の熱い思いが伝わった結果と存じます。

社会に日ごろの成果を発信することの重要性を思っていますと同時に、大学を取り巻く厳しい現状の中で、実は私たちこそが、明日への活力を参加者の皆様からいただいたことに気づかされました。

最後になりましたが、ご協力いただきました講師、実行委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

「第10回全国中学生創造ものづくり教育フェア」報告

東京学芸大学 鳴海 多恵子

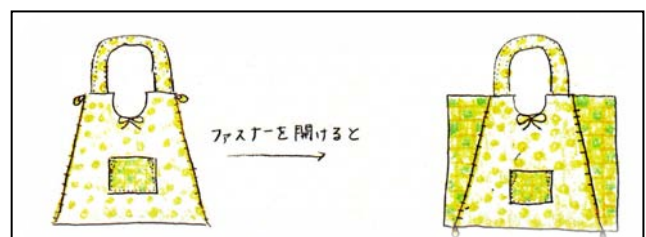
第10回は、平成22年1月23,24日に、東京都足立区の文化施設である「THEATRE1010」で開催された。被服製作のコンテストは「とっておきのアイデアハーフパンツ」コンテストとして第3回大会から7年間続いてきた。しかし、ここ数年はコンテストへの応募者が減少し、「ハーフパンツ」を課題とすることが教育現場の現実にそぐわなくなったのではないかと、という議論が起こった。新しい学習指導要領でも被服製作は必修内容として位置づけられたものの、「布を用いた物の製作」と表現され、必ずしも「衣服」製作を課題としないことが示された。従って、今後はさらに、製作教材が生活で利用される物全般に広がることが予想されることから、授業での学習活動が反映されるコンテストとする事を配慮して、本年度からは「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクールに変更になった。

コンクールの方法は、これまでと同様に、ブロック大会などの事前の選抜を経た選手が審査会場に集まり、3時間半で事前に提出した製作レポートにそって裁断から仕上げまで終了させる。審査員はその間に縫製技術、安全への配慮、作業効率を評価するとともに、事前に提出された製作レポート、完成後の作品紹介プレゼンテーション、作品の完成度・アイデアなどの評価を加えた総合点で順位を付けている。作品にはいくつかの課題が指定されている。たとえば、材料費は2000円程度、布は110cm×50～100cm、ポケットをつける、ポケット口はまつり縫いをする、スナップをつける、裏地はつけない、立体構成にする等である。作品のデザインにあたっては、“豊かな生活を創る”および“アイデア性”の要素が求められている。競技者の作品には、いろいろな工夫が盛り込まれていたが、それぞれ、製作動機に家族や友人への思いやりや環境への配慮などがあ

り、ほのぼのとした気持を与えてくれる、主旨に沿った作品ばかりであった。製作過程では、どの競技者も普段私が指導している大学生よりもはるかに作業の手際がよく、感動するほどの見事さであるが、印付け用具の使い方、アイロンかけ、まち針の打ち方、三つ折りをまつり縫いするなどでは、基本的な技術が身につけていないことが目立った。この大会に出場するに当たっては学校の先生や保護者の指導を受けたと思われるが、縫製の基礎的、基本的技術の不完全さは、生徒自身の問題だけではなく、指導者層にも及んでいるのではないかと危惧された。

写真は、被服構成学部会賞を受賞した宇都宮市立上河内中学校3年生 三上真穂さんの「絆 ～家族がつながる手づくりバッグ～」という作品とコンテストでの製作の様子である。台形のバッグが、物をたくさん入れるときは、脇ファスナーをあけてマチを広げて使うことができる工夫がされている。

リバーシブルの布を生かしたすっきりしたデザインと、ファスナーつけなどもきれいに、しかも手際よく処理され、技術の高さが評価された。部会から賞状と副賞の洋裁小物と手芸セットを贈呈したところ、表彰式の後に私のもとにお母様とこられ、「すぐに使いたい」と大変喜んでいただいた。



関連学会短信

<ITAA2009 年次大会>

東京田中短期大学 小田巻 淑子

2009年ITAA年次大会は、10月28日から10月31日までシアトル近郊のHyatt Regency Bellevueホテルにおいて開催されました。Bellevue市はその名のとおり、湖と山に囲まれた自然豊かな美しい町です。Tacoma国際空港到着時は、一人で参加する緊張感で一杯でしたが、荷物を待つ間にシアトル在住の日本女性から親切なアドバイスを受け助かりました。それによると、シアトル近郊はシリコンバレーに次ぐ米国屈指のIT関連企業が集中し、なかでもBellevue市は高級住宅地で治安も良いという話を聞き、一安心しました。

翌日は、2つのPre Conference tourに参加。午前中は山岳衣服の開発で急成長を遂げたREIの本部を訪問しました。ゴアテックスを越える？繊維の開発から、雨雪を完全に遮断する衣服の縫製の工夫など、開発のエピソードは興味深いものでした。その繊維は、先発のゴアテックスと比べて薄く、頻りに洗濯した方が、汗の放出機能を維持するなど、衛生面においても優れていることを強調していました。製品開発にあたった30代後半の若きリーダーからは、妥協しない精神と行動力で臨んだ様子が次々報告されました。特に、雪山でのシーズン毎の着用実験は、市民参加型イベントとして開催し、一般登山者やスキーヤーによる意見をもとに改良を重ねたそうです。後半、グループの代表的ショップを見学しました。1階から3階まで吹き抜けた巨大暖炉を店舗の中央に据え、そこから広い店内が一望できる斬新なデザインです。壁を一切排除し、鉄骨をそのまま生かした、米国らしいスケールの素朴な店舗は、エコの時代にふさわしい建物でした。ちょうど、インターンシップで研修中のノースカロライナ大学院生が、堂々とした解説で私達を案内するなど、産学協同の試みがごく自然に行われている様子が伺えまし

た。もう一つの見学先、カジュアルスポーツウェアのEddie Bauerは、日本でも通信販売や店舗展開されていますが、アジアを中心とした総売り上げの6割強が日本である事に驚きました。その背景には、中高年に対応する豊富なサイズ展開や、丈夫でシンプルなデザイン等があるのかもしれない。

学会初日のGeneral Sessionと最終日のSpecial Topic SessionでITAA協賛、タイ農業省主催のシルクコンテストについて報告がありました。責任者のDr. Sonya Sue Mayerから2009年8月に開催されたAsean会議のオープニングセレモニーの様子と、そこで発表された入選10作品の制作者の一人として、全員に紹介された事は、製作の苦労と共に良き思い出となりました。

今回、Historic/culturalやProduct Design and Fashionの発表に興味をもち視聴しましたが、聴衆の中に、酸素ボンベと共に発表に聞き入る熱心な方があり感服しました。決して軽症でないその方に、周囲もごく自然に接している様子が印象的でした。他にも発表する妻の為に、乳母車と共に廊下で待機する夫の姿などがありました。Design Exhibitionの展示会場では、偶然、準備中のノースカロライナ大学のTracy Lamar准教授に再会しました。部会旅行でご存じの先生方も多いと思います。今は結婚され2歳のお子さんと共にAssistant Curatorとして活躍する姿に、働く女性の意気込みと周囲の暖かさを感じました。今回、アクセプトされた展示作品・絞りのドレスは、若い人の反響もあり、再会や共に語り合う機会となりました。最終日の朝食会はハローウィンのお菓子が並び、役員や実行委員は思い思いのコスチュームに身を包み登場。その出来映えとユーモアセンスに会場は盛り上がりました。また実行委員長のアイデアで、急遽コンテストを開催するなど和やかな雰囲気うちに終了しました。

<日本人間工学会 衣服人間工学部会>

共立女子大学(非) 大久保 美雪

日本人間工学会の中の研究部会のひとつが、衣服人間工学部会である。現在の部会員は80名で、全国の家政系大学や短大の先生方、下着メーカーやアパレルメーカーなどの方々である。

昨年度から研究テーマを「衣生活の近い未来を考える」とした。人間と衣服との関係の評価方法を柱に、人体計測はもとより、衣服の設計条件からその機能性や安全性などに至る諸問題について検討していくことを目的とし勉強会や見学会が開催されている。今年度は特に、若手研究者や学生の勉強の機会となるように基本的な内容も含めての例会であった。今年度の活動内容は以下の通りである。

<第1回例会> 2009年6月27日(土)

「衣服圧の測定と活用事例」

「ニットの基本 ～初心者のために～」

東京都立産業技術研究センター

上席研究員 岩崎謙次氏

女性の高齢者用衣服の開発にあたり、アンケート調査および衣服圧測定装置を使って、着用しやすさについてご講演いただいた。またニットの基本についても解説していただいた。

<第2回例会> 2009年10月3日(土)

「快適な靴の選び方」

足と靴と健康協議会 事務局長 俣野好弘氏

靴の選び方について分かりやすくご説明いただいた。足部の計測方法など実演もしていただき、学生にも聴講させたが、日常的なことでも興味深い内容であったため熱心に聴いていた。

<第3回例会> 2010年3月3日～4日

山形方面への見学会

3日 オリエンタルカーペット(株) 佐藤繊維(株)

4日 (株)新田

山形県へ行って、今話題の繊維産業や紅花染め・米沢紬の工房の見学を行う予定である。

<日本衣服学会>

埼玉大学 川端 博子

衣服学会は会員数250名弱の小規模な学会であるが61年の歴史があり、年2回の学会誌を刊行している。第61回総会ならびに研究発表会が平成21年11月7日大妻女子大学にて開催された。発表は16演題で、衣服製作の教育に関するもの、被服の機能と快適性、色彩、福祉と衣料に関するものなど多様な内容であった。

特別講演はポーラ文化研究所の津田紀代先生の「日本の化粧文化—伝統化粧からハイカラ化粧へ—」であった。江戸時代を中心とした化粧からみる生活文化の一面を知る大変興味深い内容で、もっと時間をかけて伺いたいと感じた。

発表会後の懇親会では30名程の出席があり、料理に舌鼓を打ちながら世代・領域を超えた活発な交流がなされた。学会発足当時のことをご存知の名誉会員の先生が、遠方より駆けつけてくださり、饗饌たるお話ぶりとその身のこなしに一同刺激を受けた。残念なのは若手の少ないことである。投稿数・発表数が減少傾向のため、今後、投稿の経費負担を軽くする、非会員も発表が可能にするなどを検討している。

補足ながら、口頭発表はどこの学会も大概、時間に全く余裕なくスケジュールが組まれ、それ故に有意義な質問が出されても時間で切られてしまうことを残念に感じている。発表の間に数分の余裕があったらそれが有効に活かせるのではないかと、質問がなくても次の演題の要旨に目を通すことに時間が充てればよいと思う。一運営委員として、小さな学会であるからこそできることに知恵を出し合って盛り込んでゆければと考えている。

22年度は和歌山にて開催予定なので心づもりをしていただければ幸いです。

平成 21 年度 修士論文テーマ・要旨

後期高齢女性の下半身形状の分析

日本女子大学大学院 家政学研究科 被服学専攻 田中 あづさ
(指導 大塚 美智子)

1. 緒言

現在、日本は超高齢社会を迎えており、高齢者向けの衣服の充実が求められている。中でも、加齢に伴い低下する身体機能をサポートする衣服の重要性は大きいと考えられる。高齢者の特徴の一つとして、加齢に伴う筋力の低下などが引き起こす体型変化が挙げられるが、現在作られている衣服の多くは体型を考慮しておらず実情に即していない。本研究では、体型がより変化すると考えられる後期高齢者の女性を対象とし、下半身の細部項目や座位項目を用いて、上半身とのバランスや姿勢という新しい視点から高齢者の下半身形状について分析を行う。

2. 資料・方法

「日本人の人体計測データベース 1992-1994」を用いて、20代女性 3059 名と 60 歳以上の女性 1031 名の下半身項目および姿勢に関する 45 項目について計測部位・計測方法別に分類した。年代ごとに各項目の平均値および 20 代を 1 とした場合の身長比を算出し、若年者と 60 歳以上の女性の体型特徴を詳細にとらえるため、体型比較、体型バランスの変化について分析・考察した。また、60 歳以上を 60～64 歳 202 名、65～69 歳 284 名、74～74 歳 278 名、後期高齢者 267 名に分類し、同様に 71 項目について高齢者における体型比較を行った。次に主成分分析を行い、体型を表す因子を抽出した。次に、立位姿勢、歩行姿勢、座位姿勢における計測データの変化をとらえるため、浜松ホトニクス株式会社製ボディラインスキャナを用いて 60 代女性 1 名の被験者について三次元計測を行った。また、歩行動作における若年者と高齢者の相違をとらえるため、

20 代女性 1 名と 70 代女性 2 名を被験者とし、ヒューテック株式会社製 MMpro-3D を用いて動作解析を行った。

3. 結果

平均値比較から、高齢者は背が低く、腹部の突出や乳房、臀部の下垂、背部の前湾、下腿の衰退が起こっていることがわかった。特に後期高齢者では背部の前湾による身長低下や脚部の衰退、乳房の下垂、腹部の突出が目立つ体型であることがわかった。

これらの項目に対して主成分分析を施した結果、高齢者の体型を決定づける因子は体格の大小、肥瘦度に加えて姿勢であることがわかった。高齢者の高径の減少は上半身に集中する。これは脊椎の前湾が原因であると考えられる。身長に対する下半身の割合は大きくなり、特に後期高齢者は下半身が細くなることが明らかとなった。

三次元計測では、立位姿勢、歩行姿勢では 75 項目、座位姿勢では 68 項目について計測を行った。立位姿勢に対する変化をとらえたところ、歩行姿勢では肩部や背部項目は増加し、胸部項目は減少した。座位姿勢では、背幅や肩甲骨下角間距離が増加し、背面が開き丸まった姿勢になることが示された。

このように姿勢の変化による脊柱の湾曲や肩部の前後移動が主に体表長に影響し、背部や胸部は動きに合わせて増減し、肩部から腹部にかけては減少、腹部や臀部は周径、厚径等も増加することがわかった。

動作解析から、歩行における高齢者の姿勢は若年者よりも前傾しており、歩幅が狭く、転子点の位置が低く、ウエスト基点の上下動が小さいことがわかった。

文字の読みやすさに及ぼす照度レベルの影響 —高齢者と若年者—

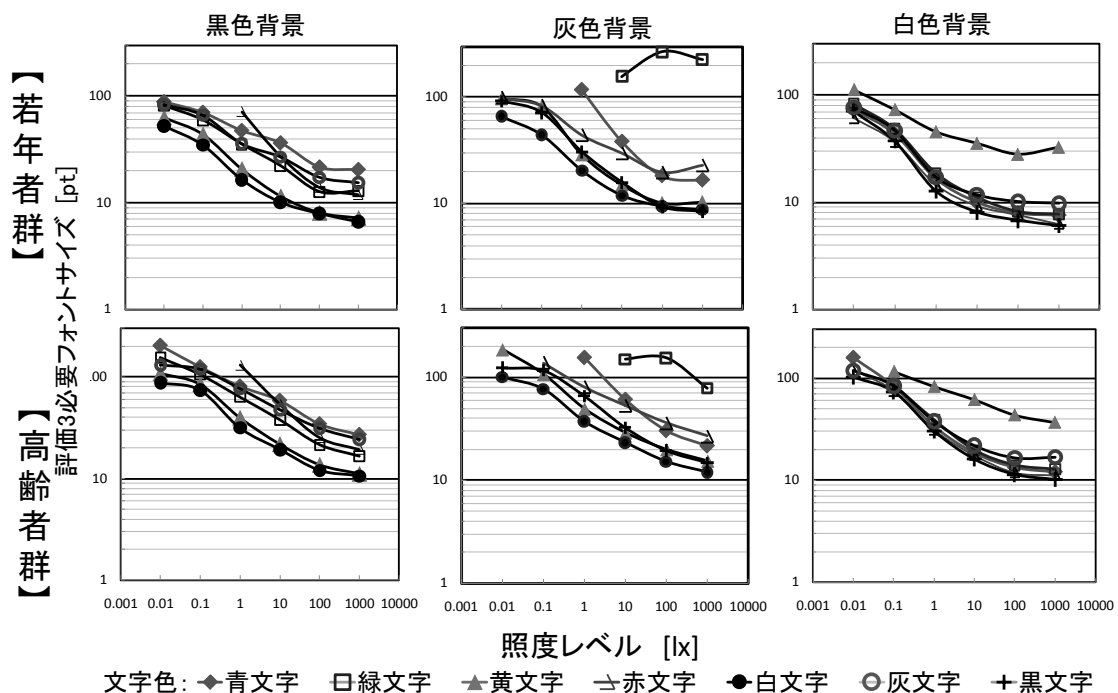
日本女子大学大学院 家政学研究科 被服学専攻 下村 香理
(指導 芦澤昌子)

【目的】衣服のタグをはじめとし、洗剤や薬のパッケージなどは様々な色文字や背景色が用いられている。これらの文字は店舗など明るいところでは読みやすいが、実用時は押し入れや脱衣所など比較的照度レベルの暗い場所で読まれており読みにくいものも多い。本研究では、高齢者群と若年者群のどちらにとっても読みやすいフォントサイズの提案を行った。

【方法】照度レベルは0.01lx, 0.1lx, 1lx, 10lx, 100lx, 1000lxまで6段階とし、被験者は高齢者14名(平均年齢68.8歳)と若年者18名(平均年齢21.5歳)で、文字色はユニーク色に近い赤、黄、緑、青と黒、灰、白の計7種類、背景色は黒、白、灰の3種類とした。文字のサイズは4~90ptの間で13種類とした。アゴ台で視角を固定し、50cm離れた刺激の読みやすさを5段階評価してもらった。読みやすさの評価は“非常に読みにくい(評価1)”, “読みにくい(評価2)”, “普通(評価3)”, “読みやすい(評価4)”, “非常に読みやすい(評価5)”の5段階とした。読めない場合は“読めない(評

値0)”とし、別個に答えてもらった。

【結果】色文字の読みやすさには照度レベルが大きく影響している。同じフォントサイズでも照度レベルが低くなるに従い、読みやすさは低くなる。また背景色によって、特に薄明視において文字色間での評価に差が見られ、この差は白背景では小さく、灰背景、黒背景で顕著である。図は評価3(ふつう)と評価するのに必要なフォントサイズを求め、照度レベルごとの必要フォントサイズで示している。薄明視以下になると高齢者は若年者の約2~3倍の大きさのフォントサイズが必要である。色文字の読みやすさには背景色と文字色の輝度コントラストが主に効いており、輝度コントラストが高いと必要フォントサイズは小さく、つまり読みやすい。輝度コントラストの高い組み合わせは白背景に黒文字、灰背景に白文字、黒背景に黄色、白文字があげられる。本実験では色差はあまり相関が見られなかった。今回は普通に読めると評価されたところで分析したが、“読みやすい”という評価をえるためにはどういう条件か今後分析を行う。



会 務 報 告

1. 平成 21 年度会務報告

1) 事業報告

① 臨時総会

日時：平成 21 年 5 月 30 日（土）

場所：武庫川女子大学 S - 46 教室

（新型インフルエンザの影響で中止）

② 総 会

日時：平成 21 年 8 月 25 日（火）

場所：あわら温泉 グランディア芳泉

③ 夏期セミナー 「社会的ニーズに対応した

アパレルの開発動向」

日時：平成 21 年 8 月 25 日（火）・26 日（水）

場所：あわら温泉 グランディア芳泉

④ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 22 年 1 月 23 日（土）・24 日（日）

場所：シアター1010

⑤ 研究例会 「大学と中・高校の被服製作学習の

発展に向けて」

日時：平成 22 年 3 月 26 日（金）

場所：和洋女子大学

⑥ 部会誌 31 号発行 平成 22 年 3 月 31 日（水）

⑦ ホームページの維持管理

2) 庶務報告

① 第 1 回運営委員会

日時：平成 21 年 5 月 30 日（土）

場所：武庫川女子大学 S-46 教室

（新型インフルエンザの影響で中止）

② 第 2 回運営委員会

日時：平成 21 年 8 月 25 日（火） 11：30～

場所：あわら温泉 グランディア芳泉

i) 平成 21 年度夏期セミナーについて

ii) 平成 21 年度総会について

iii) 平成 20 年度事業報告

・平成 20 年度夏期セミナーについて

・平成 20 年度科研費による公開講座について

iv) 平成 20 年度収支決算について

v) 平成 21 年度事業計画について

・平成 21 年度研究例会について

・全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

・部会誌 31 号の発行について

vi) 平成 21 年度予算案について

vii) 次期監事の推薦について

viii) 家政学会の一般社団法人への移行に伴う部会の
対応について

・部会を学会組織とするか任意団体にするかの
検討

・部会総会開催時期の検討

3) 会計報告（次頁以降参照）

2. 平成 22 年度事業計画

① 総 会 (社) 日本家政学会

平成 22 年度年次大会時

② 夏期セミナー 平成 22 年 8 月

③ 全国中学生創造物づくり教育フェアへの後援

平成 23 年 1 月

④ 研究例会 平成 23 年 3 月

⑤ 部会誌 32 号発行 平成 23 年 3 月末

⑥ ホームページの維持管理

⑦ その他

平成20年度 被服構成部会夏期セミナー 収支報告書

◆ 夏期セミナー
収入の部

費目	予算	決算	備考
参加費	600,000	591,500	会員 10,000円×49名 非会員 12,500円×7名 学生 2,000円×7名
合計	600,000	591,500	

支出の部

費目	予算	決算	備考
会場費	75,960	82,050	
講師謝礼	34,000	33,333	徴収税 3,333円を含む
シンポジスト謝礼	67,000	66,665	徴収税 6,665円を含む
要旨集	84,000	84,000	
印刷代	50,000	1,280	
雑費	20,000	22,200	
会議費	70,000	3,690	
通信・輸送費	20,000	26,485	
交通費	50,000	62,880	
庶務費	30,000	1,806	
見学手土産代	3,000	3,150	
人件費	50,000	54,500	
予備費	46,040	0	
合計	600,000	442,039	

差引残高＝ ¥149,461

◆ 懇親会
収入の部

費目	予算	決算	備考
懇親会費	135,000	184,500	会員 4,500円×41名
合計	135,000	184,500	

支出の部

費目	予算	決算	備考
料理	100,000	160,000	パーティー代
予備費	35,000	9,000	お花代
合計	135,000	169,000	

差引残高＝ ¥15,500

◆ 見学バス代
収入の部

費目	予算	決算	備考
バス代	39,000	63,700	会員 1,300円×49名
合計	39,000	63,700	

支出の部



費目	予算	決算	備考
バス代	39,000	36,750	
合計	39,000	36,750	

差引残高＝ ¥26,950

会計 小田巻淑子、土肥麻佐子、雲田直子

上記事項に相違ございません
平成20年12月3日

会計監査

金谷 喜子 
佐藤 真知子 

平成20年度 収支決算報告(H20. 4. 1~H21. 3. 31)

(1)部会会計

(円)

費 目		予 算	決 算	備 考
収 入	部会費徴収	325,000	292,000	116人分(複数年度払い込みを含む、1名2000円払い込み)
	その他の収入	0	47,827	金谷先生寄付金30,000、利子4,329、夏期セミナー講師源泉徴収税預かり9,998、要旨集3,500、
	基金より	205,000	0	
	前年度繰越金	0	0	
	計	530,000	339,827	
支 出	総会運営費	100,000	73,533	講師所得税3,333円を含む
	部会誌発行費	150,000	107,940	部会誌印刷代
	人件費	10,000	0	
	会議費	20,000	0	
	庶務費	20,000	2,743	
	通信費	30,000	23,660	部会誌発送等
	交通費	30,000	7,860	部会誌発送業務交通費
	事業費	150,000	90,482	ものづくり競技会、Hp更新・維持管理、公開講座、夏期セミナー講師謝金源泉徴収税預かり9,998を含む
	税金分	10,000	0	
	予備費	10,000	0	
	基金へ	0	33,609	利子4,329を含む
		計	530,000	339,827

差引残高

0


(2)基金

		3,003,135
(内訳)	前年度繰越金	2,777,615
	利子	4,329
	夏期セミナー余剰金	191,911
	20年度差引残高	29,280


私ども監事は、被服構成学部会の会計監査を行った結果、上記事項に相違ないことを認めます。

平成21年4月1日

監事

高 部 啓 子 

監事

富 田 明 美 

平成 21 年度 被服構成学部会 予算

(1) 部会会計

(円)

費 目		21 年度予算	20 年度予算	増減
収入	部会費徴収	325,000	325,000	0
	その他の収入	0	0	0
	基金より	170,000	205,000	-35,000
	前年度繰越金	0	0	0
	計	495,000	530,000	-35,000
支出	総会運営費	100,000	100,000	0
	部会誌発行費	110,000	150,000	-40,000
	人件費	0	10,000	-10,000
	会議費	10,000	20,000	-10,000
	庶務費	10,000	20,000	-10,000
	通信費	40,000	30,000	10,000
	交通費	50,000	30,000	20,000
	事業費	155,000	150,000	5,000
	税金分	10,000	10,000	0
	予備費	10,000	10,000	0
	基金へ	0	0	0
	計	495,000	530,000	-35,000

(2) 基金

	現在高	支出	残高
活動基金	3,003,135	170,000	2,833,135



お 知 ら せ

1. 会費納入について

平成 22 年度の被服構成学協会費 2500 円は、5 月中に下記郵便払込口座にご送金くださるよう、お願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00160-2-322300 日本家政学会被服構成学協会

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願い致します。

〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-2-2-1

文化女子大学 服装造形学研究室 磯崎 明美 宛

TEL&FAX 03-3299-2352

E-mail isozaki@bunka.ac.jp

2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは下記までお願いいたします。

〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地

大妻女子大学 短期大学部 家政科 土肥 麻佐子 宛

TEL 03-5275-6036

E-mail m-dohi@otsuma.ac.jp

※ なお、退会届につきましては(社)日本家政学会の退会手続きとは別処理になっていますので、部会への手続きも併せてしていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成 22 年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

4. 平成 21 年度新入会員

倉 みゆき (東京家政大学) 佐々木 貴枝子 (東京田中短期大学) 村上 かおり (広島大学大学院)
高橋 美登梨 (目白大学) 與儀 由香里 (大妻女子大学) 下坂 知加 (中京短期大学 (非))
亀井 佑子 (國學院大學栃木短期大学)

ご 案 内

平成 22 年度 被服構成学部会 夏期セミナー 「被服構成学的視点からの情報発信」 - 大学発ファッションショーが果たす役割 -

期 日： 2010 年 8 月 23 (月), 24 日 (火)

会 場： 日本女子大学新泉山館国際交流センター

〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

プログラム概要

	8 月 23 日 (月)		8 月 24 日 (火)
12:30～ 13:00～13:05 13:05～14:35	受付開始 開会の辞 基調講演 1 「ファッションショーとブランド (仮題)」 現役ファッションデザイナー (交渉中)	9:30～10:30 10:30～10:40 10:40～12:10	話題提供 「パリコレの現場から大学教育の現場へ」 和洋女子大学 滝澤 愛 休憩 パネルディスカッション 「大学発のファッションショーの意義」 コーディネータ 日本女子大学 大塚美智子 パネリスト ①東京家政大学 雲田 直子 ②相模女子大学 田中 百子 ③東京田中短期大学 小田巻淑子 ④文化女子大学 磯崎 明美
14:35～14:55 14:55～16:25	休憩 基調講演 2 「ファッションビジネスにおける ファッションショーの役割」 元西武百貨店バイヤー 増田 泰子	12:10～12:20 13:30～16:30	閉会の辞 見学 (予定) ①富田染工藝 (江戸小紋染色) ②早稲田大学坪内博士演劇博物館 など
17:30～19:30	懇親会		

※ 部会員には追って詳細をご案内申し上げます。

<連絡先> 〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

日本女子大学 被服学科 大塚美智子

TEL&FAX 03-5981-3486 E-mai : mohtsuka@fc.jwu.ac.jp

社団法人日本家政学会被服構成学部会 会則

- 第1条(名称) 本会は、社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。
- 第2条(目的) 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。
- 第3条(事業) 本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 総会を開催する。
 - 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
 - 3 部会誌を発行する。
 - 4 その他の必要な事業を行う。
- 第4条(会員) 本会の会員は、次のとおりとする。
- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する社団法人日本家政学会会員で、本部会の目的に賛同して入会した個人。
 - 2 名誉会員 元部会長、または、特に部会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。
- 第5条(入会) 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。
- 第6条(退会) 会員が退会をしようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。
この場合、既納の会費は返却しない。
- 第7条(役員) 本会に次の役員をおく。
- 部会長 1名
副部会長 2名
運営委員 若干名
監事 2名
- 第8条(役員を選任) 役員を選任は、次のとおりとする。
- 1 部会長および監事は、運営委員会がこれを推薦し、総会で選任する。
 - 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。
- 第9条(役員任期) 1 役員任期は2年とし、再任を妨げない。
2 役員再任については、申し合わせを別に定める。
- 第10条(役員職務) 役員職務は次のとおりとする。
- 1 部会長は部会を代表し、会務を統轄する。
 - 2 副部会長は部会長を補佐し、必要な場合には部会長の職務を代行する。
 - 3 運営委員会は本会の業務を運営する。
 - 4 監事は本会の会計監査を行う。
- 第11条(会計) 本会の会計は次のとおりとする。
- 1 経費は正会員の会費、その他をもってまかなう。
 - 2 会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月末日に終了する。

以上

附則

- 1 この会則の改正は、総会の議決による。
- 2 施行に関する内規は別に定めることができる。
- 3 この会則の施行は昭和54年10月8日からとする。
- 4 この会則の一部改正の施行は昭和59年8月3日からとする。
- 5 この会則の一部改正の施行は昭和63年8月1日からとする。
- 6 社団法人日本家政学会部会規程に基づき、平成15年8月27日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
- 7 この規約の施行は平成15年8月27日からとする。
- 8 社団法人日本家政学会部会規程に基づき、平成18年8月22日から被服構成学部会規約を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする。
- 9 この会則の施行は平成18年8月22日からとする。

社団法人日本家政学会被服構成学部会 申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成する。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事及び編集幹事
(1) 必要に応じて事務局幹事及び編集幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事及び編集幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事及び編集幹事は役員会に陪席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。

附則

この申し合わせは、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約に基づくもので、改正にあたっては、運営委員会の議を経て、総会で承認する。

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この会則の一部改正の施行は、平成18年3月31日からとする。

平成 20・21 年度役員

部会長	泉 加代子	京都女子大学
副部会長	布施谷節子	和洋女子大学
	岡部 和代	京都女子大学 短期大学部
運営委員		
(庶務)	森 由紀	甲南女子大学
	千葉 桂子	福島大学
	川上 梅	東京家政学院大学
(会計)	林 仁美	大阪夕陽丘学園 短期大学
	植竹 桃子	東京家政学院 短期大学
	服部由美子	福井大学
(企画)	鳴海多恵子	東京学芸大学
	渡部 旬子	文化女子大学
	片瀬眞由美	金城学院大学
	森下あおい	滋賀県立大学
(広報)	大塚美智子	日本女子大学
	鈴木 明子	広島大学大学院
	小田巻淑子	東京田中短期大学
	十一 玲子	神戸女子大学
(編集)	川端 博子	埼玉大学
	別府 美雪	共立女子大学 (非)
	石垣 理子	昭和女子大学

<30 周年記念特集号立案>

	猪又美栄子	昭和女子大学
	雲田 直子	東京家政大学
(監事)	高部 啓子	実践女子大学
	富田 明美	椋山女学園大学

事務局 〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町35
 京都女子大学 家政学部 生活造形学科
 TEL 075-531-7166
 FAX 075-531-7166
 E-mail : izumik@kyoto-wu.ac.jp

平成 22・23 年度役員

部会長	布施谷節子	和洋女子大学
副部会長	岡部 和代	京都女子大学 短期大学部
	鳴海多恵子	東京学芸大学
運営委員		
(庶務)	土肥麻佐子	大妻女子大学 短期大学部
	原田 妙子	名古屋女子大学 短期大学部
	田中 早苗	東京家政大学
(会計)	磯崎 明美	文化女子大学
	渡部 旬子	文化女子大学
	十一 玲子	神戸女子大学
(企画)	増田 智恵	三重大学
	小田巻淑子	東京田中短期大学
	森下あおい	滋賀県立大学
(広報)	大塚美智子	日本女子大学
	植竹 桃子	東京家政学院大学
(編集)	渡邊 敬子	京都女子大学 短期大学部
	片瀬眞由美	金城学院大学
(監事)	大村 知子	元 静岡大学
	猪又美栄子	昭和女子大学

事務局 〒272-8533 千葉県市川市国府台2-3-1
 和洋女子大学 被服構成学研究室
 TEL 047-371-2196 (ダイヤルイン)
 FAX 047-371-1336 (代表)
 E-mail : fuseya@wayo.ac.jp

(社)日本家政学会被服構成学部会入会申込書

申込年月日	年 月 日	受付年月日	年 月 日
ローマ字			
氏名	氏	名	
西暦 19 年生	性別	男 女 (どちらかを○で囲む)	
家政学会所属支部			
自宅住所	〒(—)		
	TEL		FAX
	E-mailアドレス		
勤務先・職名 及び所在地	勤務先		職名
	〒(—)		
	TEL		FAX
	E-mailアドレス		
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>		
最終学歴			
学位			
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)		

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

- ◆ 個人情報保護には十分に注意をいたします。
- ◆ 部会申込書は被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL : <http://h-kohsei.com>

編集後記

31号をお届けいたします。原稿執筆などご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。私事ですが、お恥ずかしいことに今年度は部会の活動にほとんど参加ができませんでした。自分が参加しなかった内容について編集作業を進めることはなんとも機械的になってしまいました。反省しております。地方に住むようになってインターネットの普及により情報は得られますが、やはりさまざまな面で都会との格差を痛感する毎日です。自然に癒されながら、今自分にできることからやっていくしかない！と思っております。 (大久保)

記念号だった30号に引き続き、31号の編集を担当させていただきました。この2年間わからないことばかりで、川端先生、大久保先生にはご迷惑をおかけしながらいろいろとお教えいただき、なんとか無事任務を終えられそうです。編集は縁の下の力持ちですが、この仕事を通じてその年の部会のエッセンスにいち早く触れることのできる役得もありました。同時に、今まで多くの先輩方に支えられてこの部会誌も発行されてきたことを実感し、今ひとつ遠い存在だった部会運営のことが身近に感じられるよい機会となりました。お忙しい日々の中、編集のスケジュールに合わせてご執筆・ご協力いただいた先生方に深く感謝申し上げます。 (石垣)

平成22年3月31日・発行

発行：(社)日本家政学会 被服構成学部会

印刷：西桜印刷株式会社

TEL：03 - 3568 - 2543